

8 課

5月23日

天地創造

——基礎としての創世記（その1）



安息日午後

5月16日

今週のテーマ

暗唱聖句

初めに言ことばがあった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。（ヨハネ1：1～4、口語訳）

初めに言ことばがあった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。（ヨハネ1：1～4、新共同訳）

今週の聖句

ヨハネ1：1～3、創世記1：3～5、出エジプト記20：8～11、黙示録14：7、
マタイ19：3～6、ローマ5：12

創世記の最初の数章は、聖書の残りの部分の基礎を成しています。聖書の主要な教えや教理の源は、この数章の中にあります。私たちはここに三位一体の神の御性質を見いだします。父、子（ヨハ1：1～3、ヘブ1：1、2）、“霊”（創1：2）として、この世界とその中のあらゆるもの（最後には人間〔創1：26～28〕）を創造するために、協調して働いておられるからです。

創世記はまた、安息日（同2：1～3）、悪の起源（同3章）、メシアと救済計画（同3：15）、世界規模の洪水（同6～9章）、契約（同1：28、2：2、3、15～17、9：9～17、15章）、言語と人の拡散（同10、11章）、天地創造からアブラハムに至る聖書の年代の枠組みとなる家系図（同5、11章）なども私たちに紹介しています。

また、神が語られた言葉の力（創1：3、Ⅱテモ3：16、ヨハ17：17）、人間の性質（創1：26～28）、神の御性質（マタ10：29、30）、男と女の結婚（創1：27、28、2：18、21～25）、地球とその資源の管理責任（同1：26、2：15、19）、新しい創造という約束された希望（イザ65：17、66：22、黙21：1）といったことはみな、創世記のこれら最初の数章に基づいており、私たちは今週と来週をかけてそれらを研究します。

問1 創世記1:1を読んでください。どのような深い真理がここで明らかにされていますか。

聖書は最も崇高で深い言葉で始まっています。その言葉は単純ですが、同時に、注意深く研究するなら、計り知れない深さを含んでいます。実際、聖書の最初の行は、私たちは何者であるのか、私たちはなぜここにいるのか、私たちはどのように出現したのか、といった哲学の最大の問題に答えているのです。

私たちが存在するのは、神が過去のある時点で私たちを創造されたからです。私たちは無から生まれたものではありません。また、起源に関して現代の科学モデルの多くが現在教えているように、最終的な目的もなく、計画された方向性もなく、偶然に出現したのでもありません。ダーウィンの進化は、あらゆる点において聖書と正反対であり、進化論と聖書を調和させようとする人たちの試みは、クリスチャンを愚かしく見せています。

私たちはまた、時間の中のある絶対的な時点で（「初めに」）神によって創造されました。つまり、神がこの「初め」よりも前に存在しておられたに違いないということです。言い換えれば、神は、時間が創造される前に、時間が「夕べ」と「朝」、月や年といった（地球と太陽や月との関係によって示される）サイクルで表現されるよりも前に存在しておられたのです。この絶対的な初めは、聖書のほかの箇所でも言及され、支持されています。それらの箇所は、神の創造の業の性質や方法を絶えず再確認しています（ヨハ1:1～3）。

問2 ヨハネ1:1～3、ヘブライ1:1、2を読んでください。創造の主体はどなたでしたか。そのお方が十字架で亡くなられたということの意味について考えてください。

聖書は、創造の主体がイエスであったと教えています。聖書には、「万物は言^{ことば}〔イエス〕によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった」（ヨハ1:3）と書かれています。「神は……御子によって世界を創造されました」（ヘブ1:1、2）。万物の起源が初めにおけるイエスにあるので、私たちには、彼が自ら始めたものを最終的に成し遂げてくださるという希望を持つことができます。なぜなら、彼は「アルファであり、オメガであ（り）」（黙1:8）、「初めであり、終わりである」（同22:13）からです。

近年、創造週を比喩、たとえ話、あるいは神話にすぎないとみなす傾向があります。この傾向は、進化論をきっかけに生まれたもので、進化論は地球上の生命の発達を説明するために長い時代を想定します。

問3 創世記1:3~5、出エジプト記20:8~11を読んでください。これらの文脈において、「日」という言葉はどのように用いられていますか。

「日」に相当するヘブライ語の「ヨム」は、天地創造物語の中で、文字どおりの1日をあらわすために一貫して用いられています。創世記の創造物語の中には、今日、私たちが1日と理解するように、文字どおりの1日以外のものを意味することをほのめかす要素は何もありません。実際、その日が文字どおりのものではないと考える学者たちの中にも、創世記の記者の意図は文字どおりの日を描くことだったと認める人もいます。

神御自身が時間の最初の構成単位をこの名前で呼ばれたというのは(創1:5)、興味深いことです。「ヨム」(ヘブライ語で「日」)は、「夕べがあり、朝があった」(創1:5、8ほか)という言葉で定義されています。この言葉は、複数形ではなく、単数形で用いられており、1日を意味します。

従って、天地創造の7日間は、完全な時間の構成単位として理解されるべきであり、基数の1(ヘブライ語で「エハド」。1の日)で始まり、そのあとに序数が(第二の日、第三の日、第四の日……というように)続いています。このパターンは、日の連続した順序を示しており、第七の日で終わっています。これらの日々の間に何らかの隔たりがあることを示唆するものは、言葉の使い方の中にも、物語の形式自体の中にも見当たりません。天地創造の7日間は、確かに、私たちが今日「日」と表現するのと同じ7日間なのです。

また、日が文字どおりの意味であることは、神が御自分の指で第四の掬を書かれたときにも、当然のこととみなされています。それは、第七日安息日の根拠が、文字どおりの創造週の順序に基づいていることを示しているのです。

創世記の天地創造は、聖書の中の唯一の創造ではありません。再臨の際の再創造もあります。その時、神は「最後のラツバが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちに」(Iコリ15:52)死を不死に変えてくださるのです。しかし、もし神が再創造においてこれを一瞬でおできになるのなら、有神論的進化論が教えるように、最初の創造のために神はどうして何十億年も時間をお使いになったのでしょうか。

今日、第七日安息日は、世俗社会や宗教界において激しく攻撃されています。この事実は、世界的企業の勤務表の中にも、ヨーロッパの多くの国々のカレンダーが週の第一日を月曜日にし、第七日を日曜日にするという意図的変更の中にも見られます。また、気候変動に関する教皇の最近の回勅の中にも見られます。その回勅は、第七日安息日を「ユダヤ人の安息日」と呼び、地球温暖化を軽減するために休息の日を順守するよう世界に奨励しているのです（フランシスコ教皇『ラウダート・シ』2015年172、173ページ参照）。

問4 創世記2：1～3、出エジプト記20：8～11、マルコ2：27、黙示録14：7を読んでください。創造週の理解の仕方は、第四の掟とどのように結びついていますか。また、三天使の使命とどのように結びついていますか。

聖書には、「第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった」（創2：2）と書かれています。多くの創造論者は、今日、神の創造の業が6日間でなされたことは強調しますが、6日目に終わらなかったことは認めません。神の業は、安息日を創設したときに終わったのです。だからこそイエスは、「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」（マコ2：27）と言うことがおできになりました。イエスがこのような権威ある言葉を口にすることがおできになったのは、彼が安息日を、神と神の民の永遠のしるし、封印として創造されたからでした。安息日はヘブライ人のためだけにあったのではなく、全人類のためにあったのです。

創世記は、安息日を創設したあとにイエスがなさったことを三つ伝えていきます。第一に、彼は「安息なさ（り）」（創2：2）、私たち人間と安息をともにしたいという願いを実際の行動で示されました。第二に、彼は第七日を「祝福」（同2：3）されました。創造物語の中で、動物は祝福され（同1：22）、アダムとエバも祝福されていますが（同1：28）、特別に祝福された唯一の日が第七日です。第三に、神はこの日を「聖別された」（同2：3）のでした。

聖書の中で、このような三つの指摘を受けている日はほかにありません。しかし、この三つの行為は第四の掟の中で繰り返されています（出20：11）。その時、神は御自分の指でそれを記し、安息日の基礎として天地創造を指し示されたのです。

黙示録14：7と出エジプト記20：11において、安息日の戒めは、創造主を礼拝する根拠として直接的に言及されています。安息日とのこのような直接的つながりは、いかに終末時代の諸事件と結びつきますか。

私たちはこの10年間、社会や政府による結婚の定義の仕方が大きく変化するのを見てきました。世界中の多くの国が同性婚を承認したことで、1人の男と1人の女を中心として成る家族構成の考え方がくずされました。これは多くの点において前例のない展開であり、結婚制度、教会と国の関係、また聖書に定義されているような結婚と家族の神聖さなどについて、あらたな疑問を投げかけています。

問5 創世記1:26~28、2:18、21~24を読んでください。これらの聖句は、結婚に対する神の理想について、どのようなことを教えていますか。

第六の日に、神は人間の創造という天地創造の山場を迎えられました。興味深いことに、創世記1:26で初めて神に複数形が用いられています——「我々にかたどり、……人を造ろう」。互いに愛し合う関係にある三位一体の神の全位格が、今やこの地上に結婚という（神によって制定された）人間関係を創造されるのです。

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」（創1:27）。アダムは、「これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉」（同2:23）と宣言し、彼女を「女」と呼びます。結婚には、「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」（同2:24）が必要です。

聖書は、この関係が1人の男と1人の女の間で生じるべきであること、彼ら自身が、やはり男と女である父母から生まれたものであることを明確に述べています。この考えは、地球の初めての両親に与えられた命令の中でさらに明確になっています——「神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ』（創1:28）。第五の掟において、子どもたち（子孫）は自分の父母を敬うように命じられています（出20:12）。この相互関係は、異性婚以外の関係においては成り立ちえません。

マタイ19:3~6のイエスの言葉を読んでください。私たちはこの言葉から、結婚の性質や神聖さについて何を学ぶことができますか。イエスの言葉を踏まえつつ、また全人類に対する神の愛と、私たちがみな罪人であることを忘れずに、私たちは結婚に関する聖書の原則に基づいて、いかに毅然たる態度、忠実な態度を取るべきですか。

聖書は、完全な天地創造、墮罪、約束されたメシア、最終的な贖い^{あがな}を切れ目なく結びつけています。これらの主要な出来事が、人類の救済史という主題の基礎になっているのです。

問6 創世記1:31、2:15~17、3:1~7を読んでください。神の完全な天地創造に、どのようなことが起きましたか。

神は、御自分の創作物が「極めて良かった」（創1:31）と宣言なさいました。「創造は、ついに完成した。……エデンは、地の上で栄えた。アダムとエバは自由にいのちの木のところに行くことができた。この美しい世界のどこを見ても、罪の汚れや死の陰はなかった」（『希望への光』21ページ、『人類のあけぼの』上巻22ページ）。神はアダムとエバに、もし禁断の木の実を食べるなら、必ず死んでしまう、と警告しておられました（同2:15~17）。蛇は疑問で会話を始め、やがて神が言われたことを完全に否定しました——「決して死ぬことはない」（同3:4）と。サタンはエバに深い知識を約束し、彼女が神のようになるだろうと言いました。明らかに、エバはサタンの言うことを信じました。

問7 パウロは、創世記2:15~17における神の言葉をいかに追認していますか。ローマ5:12、6:23を読んでください。これらの教えは、有神的進化論とどのように関係していますか。

私たちは聖書の中で、のちの時代の聖書記者が先の時代の聖書記者の言葉を追認し、さらなる洞察を与えているのを目にします。ローマ5章から8章においてパウロは、罪と、救いのすばらしさについて書いています——「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです」（ロマ5:12）。しかし進化論的考えでは、人類より何百万年も前に死が存在していたこととなります。このような考えは、罪の起源、十字架におけるキリストの身代わりの死、救済計画といった聖書の教えに深刻な影響を及ぼします。もし死が罪と無関係であれば、罪の支払う報酬は死ではありません（ロマ6:23）、キリストが私たちの罪のために死なれる理由はなかったでしょう。このように、天地創造、墮罪、十字架は、密接に結びついているのです。最初のアダムは最後のアダムと結びついています（Iコリ15:45、47）。ダーウィンの進化論を信じることは、たとえ神の概念がその過程にいくらか加えられていようと、キリスト教のまさに根底を破壊するでしょう。

参考資料として、『人類のあけぼの』第2章「天地創造のいわれ」、第3章「天地創造の1週間」を読んでください。

「比較研究、文学的研究、言語学的研究などに基づいて積み上げられた証拠は、あらゆるレベルにおいてまとめ、ただ一つの結論に至る。創世記1章において、『ヨム』（日）という名称は、一貫して文字どおり24時間の1日を意味するという結論である」（ゲルハルト・F・ハーゼル「創世記1章の天地創造の『日』——文字どおりの『日』か、それとも比喩的な『時間』か」、雑誌『起源』1994年第21巻1号30、31ページ、英文）。

「最も偉大な人たちも、もし神の言葉によって導かれないなら、科学と啓示の関係の研究しようとして当惑することだろう。創造主とその業は、彼らの理解力を超えているからだ。彼らは自然の法則によってそれらを説明できないので、聖書の歴史は信頼できないと断言する」（『教会への証』第8巻258ページ、英文）。

話し合いのための質問

- ① 金曜日のエレン・G・ホワイトの引用文について考えてください。クリスチャンと自称する人たちでさえ、科学の主張を前にして、聖書の説明よりも科学の主張を無意識のうちに受け入れています。彼女が書いたように、その主張は、聖書の歴史は「信頼できない」ことをほのめかすのです。今日でも、私たちはどれくらい頻繁に、彼女がまさに書いたとおりのことを目にしますか。
- ② 有神的進化論を受け入れつつ、聖書を真剣に受け止めることは、なぜ不可能なのですか。もしあなたの知り合いの中に、クリスチャンであると主張する有神的進化論者がいるなら、アダムの墮罪、死とイエスの十字架との直接的つながりについてパウロが書いていること（ロマ5章参照）を踏まえて、その人に十字架を説明してもらってください。その人はどのような説明をすることでしょうか。
- ③ もし聖書が神の啓示であるなら、信者の信仰や目は、聖書の中にあらわされているより大きな現実には開かれないでしょうか。クリスチャンは、無限の神によって啓示された聖書の真理に心を開いているのに、どうして「心が偏狭だ」と呼ばれるのでしょうか。実際には、無神論的、物質主義的見方のほうが、クリスチャンの世界観よりずっと狭いのです。
- ④ 私たちは神の言葉に忠実であり続ける信者として、性同一性の問題に苦しんでいる人たちをどのように助けることができますか。〔聖書の〕姦淫の女のように罪ある人たちに対してさえ、私たちはなぜ石を投げてはならないのですか。